は、下浦を統轄した行政的支配の一端を覗くことが出来る。

だから、この開花期が、下浦開発の過渡期でもあり、下浦完達の汗の時代とも言えよう。

しかし、この勢力拡充整備が、若い佐伯隼治城主に逆作用して、梅年礼開城につながるのは皮肉である。

（つづく）

覚書

満州佐伯村おぼえ書（十二）

〈第十次昌図佐伯開拓団小史〉

会員　矢野徳弥

(三) 在満大分県報国農場の設置

昭和十九年に入り、佐伯開拓団の区域の一角に、在満大分県報国農場が設置されることになった。

報国農場は、毎年開拓団に派遣され、その指導の下に食糧生産に従事してきたこれまでの勤労奉仕隊と異なり、深刻化した日本内地の食糧危機に対処して、中央団体や府県が独自に満州に農場を開き、そこに管下の青年男女を送りこんで、直接食糧生産に当たろうとするものであった。

そして、大分県報国農場がこの地を選んだのは、直ちに利用でき、かつ成果が充分に期待できる、実証済みの耕地が準備されていたことと、必要に応じて、何時でも支援の受けられる、同郷の開拓団の域内であったからである。

報国農場の設置により、佐伯開拓団に対する米穀増産特別班（勤労奉仕隊）の来援は打ち切りとなり、これあと、開拓団と報国農場は、互いに協力しつつも、独自の道を歩くことになった。

（満州建設勤労奉仕隊の歩み）

在満大分県報国農場について書く前に、報国農場に至るまでの、満州建設勤労奉仕隊全般の歩みについて概略触れて見たい。

満州建設勤労奉仕隊が、始めて送られたのは昭和十四年であるが、始めの頃、その目的は、

〝満州国の産業開発、北辺振興、並びに開拓の三大国策の遂行にあたり、国家の中堅となるべき青少年に、勤労を通して満州建国の真義を理解せしめる。〟

という、教育的色彩の濃いもので、文部省がこれを主宰し、隊員も学生・生徒や、地方青年の中から選抜され、その派遣先は、主として既存の開拓団であった。

昭和十五年も、勤労奉仕隊の派遣は、文部省の主導下に行なわれたが、新しく特設農場の試みがなされ、農林省もこれに側面から協力を行なった。

この特設農場は、満州拓植公社が北満五か所に新設し、前期（五、六、七月）、後期（八、九、十月）の二班に分け、二千八百名の青年を派遣して、その勤労奉仕により、将来の開拓団入植地を準備する作業を行なわせたのである。

昭和十六年に入ると、文部省の外に、農林省・拓務省が独自に勤労奉仕隊の派遣をはじめた。その内訳は次のようなものである。

文部省派遣　四千七百名

○満州建国勤労奉仕隊開拓生産隊（以下興亜の名称を略す）

主として開拓団及び特設農場に派遣

○特殊作業隊

医科系、技術系の学生などの特技班、師範学校生などの教学班、女子班、一般学生班

農林省派遣　二千三百名（新設）

○米穀増産特別班

開拓団に派遣され、未利用耕地を使用して米穀増産に当たる。

拓務省派遣　七百名（新設）

○開拓応援作業隊

主として分村・分郷の母村側側から、青壮年の農業者を縁故の開拓団に派遣して、農耕・建設を援助させ、その体験を母村にもたらして、母村の人達の理解と協力を高めさせる目的で企てられた。この年、大分県から入植した、佐伯・大憩の両開拓団に送られた勤労奉仕隊は、これに属するものであった。

昭和十七年に入ると、勤労奉仕隊の性格も、教育の方というより、食糧の増産確保に重点が移り、文部省に代って農林省が主導権を握るようになった。そして先ず手がけたのが報国農場の設置である。文部省配下の特設農場のうち四つを移管させ、新しく一農場を開いてこれを報国農場とし、千三十名の隊員を派遣して、四月から十月までの七か月間は全員、残余の期間は、三分の一程度の越冬隊をもって、常設の農場経営に乗り出したのである。

この年、農場の設置主体となったのは、農業報国連盟本部・中央食糧営団・秋田県・山形県・岐阜県の五団体であった。

中央の方針を受け、佐伯開拓団に派遣された勤労奉仕隊も、開拓応援作業隊へ（拓務省）から、米穀増産推進班に代った。前年の奉仕隊は、先遣隊と一体となり、団の建設、とくに開田のために全力を尽くし、収穫物のすべてを団に残して行ったが、この年の奉仕隊は、団の指導下に、独自の経営体として米穀生産に取り組み、収穫した米は全量政府に売却して、その任を果たしたのである。

昭和十八年になると、閣議決定をもって報国農場の設置推進が決められ、政府の強い働きかけにより、新たに十県、十三農場が増設され、二千数百名の隊員が派遣された。この時期、大分県の取り組みは少し遅れていた。

昭和十九年になると、戦況は著しく悪化し、朝鮮海域も敵国潜水艦の出没により、その往来は極めて危険なものとなり、また軍事動員の強化により、農業従事者が減少し、食糧の減産も招きかねない状況にあった。

このため、政府中央において、勤労奉仕隊の派遣廃止が論議されるようになり、文部省配下の特設農場隊員千五百名と、大東亜省（拓務省の後身）管轄の、開拓増産促進隊の千名は、ついに送出を断念した。しかし農林省の態度は強硬で、戦勢の前途を顧慮することなく、二十一府県、三団体（新たに東京農大が一農場設置）をして、一躍五十農場（三十二農場新設）設置、隊員六千百四十三名（うち女子千六百十名）の派遣を強行せしめた。

この中に、大分県の報国農場も含まれていたのである。

（大分県報国農場の発足）

全般として、他県に比し、満州開拓に対する取り組みは、遅れがちであった大分県も、国側の強い要請により、昭和十九年度において、在満報国農場を設置することに踏み切った。

そして、これを具体化する段階で関係者の頭に浮かんだことは、入植以来順調な建設を進めている県出身の佐

伯開拓団に、この困難な事業の支援を托することであった。幸い、佐伯開拓団の地域には、広大な水田用地が準備されていたし、昭和十六年以来三度にわたり勤労奉仕隊が入り、現地側の受入体制もある程度整備されていたし、とくに農場がそのまま使用できる利点があり、また、比較的内地に近い南満に位置することも、非常に有利と見られた。

この県側の意向に対し、現地側もとくに異存はなかったため、位置の問題は、早くも十八年の前半に決定を見た。

次いで農場の幹部人事であるが、先ず農場長について、他県では県営の伝習農場長が起用される例が多かったが、県は設置の経緯を考え、佐伯開拓団長に農場長を兼務するよう要請し、その了承を得た。そして、場長業務の代行者である庶務主任に、団長の推せんする大竹傳を採用した。大竹傳は、団長矢野武吉の小学校時代の学友で、一時期中野村役場で机を並べた仲であった。

次に、営農指導員に、農業技術員の出である内田喜久雄と、勤労奉仕隊員として二年の現地経験を持つ川野一馬を、それに教育指導員として、青年学校教師出身の田川勝美を採用し、指導部の編成を終った。

職員の名簿を示すと、次のとおりである。

農場長（佐伯開拓団長兼務）
矢野武吉（四十四才）
南海部郡中野村（現在本匠村）出身

庶務主任
大竹傳（四十四才）
南海部郡中野村（現在本匠村）出身

営農指導員
内田喜久雄
西国東郡三重村（現在香々地町）出身

川野一馬（四十三才）
南海部郡中野村（現在本匠村）出身

教育指導員
田川勝美（二十九才）
東国東郡高家村（現在国東町）出身

農場指導部の陣容が決まると、直ちに隊員の募集が行なわれた。この頃は、男女青年ともに、国民徴用令の適用が広範に実施されていたため、報国農場隊員に加わることに特別な抵抗はなく、定数の百名は容易に確保できたが、男子隊員が少なく、約半数を女子隊員が占めることになった。

隊員は三つの小隊に分けられ、第一小隊は南海部郡佐伯市出身者、第二小隊は大野・直入両郡出身者を主体に県中部出身者、第三小隊は東西両国東・日田郡市出身者を中心に、県北部出身者により編成された。

こうして、すべての準備を終えた隊は、三月に入るとすぐ、内田・川野両指導員に引率されて、第一小隊が設営のため先発し、次いで中旬には、田川指導員に引率された第二小隊・第三小隊が現地入りし、四月一日を期して、在満大分県報国農場の、新しい歴史が始まったのである。

（つづく）

語原は――――どこからだろう　（余白うめくさ）

崖などから落ちることを、方言では「ほらけおちる」という。これはどうも「崩落」という文字、いや漢語から来たのでは変いか。そんな気がする。しかしこんな文字熟語が、庶民の生活に先にはいりこむ――そんなことがあるもんだろうか。ひまひまに方言をとらえて究さくしているが、なかなかどうも……。